



強豪復活を目指す中央大学陸上競技部駅伝チームは3月3日、東京・立川市で行われた日本学生ハーフマラソン(21.0975km)選手権に26選手が出場し、7人が自己ベストを更新するなどチーム底上げに手ごたえをつかんだ。東京一箱根間往復大学駅伝競走では「途中棄権、記録なし」に終わり、28年続けてきたシード権(10位まで)獲得が途切れた。次回の箱根駅伝は予選会9位以内が参加資格となる。

# 自己ベスト更新7人 再建の手ごたえをつかんだ中大駅伝チーム

## 滑走路からスタート

スタート地点は陸上自衛隊立川駐屯地滑走路、日ごろは関係者以外立ち入り禁止の区域だ。大事な予選会とほぼ同じ設定とあって、コースを知ろうえではまたとない機会。国営昭和記念公園とその外周道路を走るコースに試走組6人を含む32選手が挑んだ。

全国の大学から参加した選手は約1200人。そのなかで中大勢のトップは箱根駅伝3区を走った須河宏紀選手(経3)の1時間3分42秒。代田修平主将(経3)=箱根6区=が1時間4分1秒で続いた。徳永照選手(経2)=同7区=が1時間4分20秒。箱根8区で幻の区間賞と言われた永井秀篤選手(ひでのり、文2)は試走組だった。

チーム内では4位以下となるが、三宅一輝選手(法2)、大家良介選手(商3)、渡辺俊平選手(商3)らが自己ベストを記録した。

## 再建途上

最寄りのJR立川駅や同西立川駅から、スタート地点まで徒歩30分ほどかかる。熱心な中大ファンは応援小旗を持って、ここにも大勢詰め掛けていた。レース後、応援の人たちに浦田春生監督が「チームを立て直す途上です。きょうは5人がハーフマラソンに初めて挑みました。チーム一丸となって、もう一回り、いやもう二回り、力をつけていきたい」とあいさつ。代田主将は「みなさん、朝早くから応援ありがとうございます。まだ他大学とは力の差が

あります。もっと力をつけていかなければなりません。力をつけ、予選会ではトップ通過するよう頑張ります」と力強く言った。

予選会は一斉にスタートし、上位10人の合計タイムで争う。実力選手が好タイムを出しても、ほかの選手が低迷するとチーム成績はよくなる。昨年の日体大はエースの服部翔太選手(当時3年)をペースメーカーにして集団で走る作戦をとった。

その予選会を1位で勝ち上がった日体大が箱根総合優勝、2位通過の帝京大が4位。本戦出場9校のうち4校が、シード権を得る10位までに入った。

中大の当面の目標は、予選会上位通過である。

## チームの再建はごみの分別から

大改革を叫ばれているチームにあって、選手たちは寮生活から改革を始めた。関係者によると、玄関で脱いだ靴は所定の場所へ、トイレのスリッパは次の人のためにそろえる、ペットボトルは飲み残しを捨て、ラベルをはがし、キャップはエコ活動に回す。ごみもきちんと分類してから出している。負傷などでレース参加ができないときは、選手が動く周辺の小石拾い、ごみ拾いなどをして、選手にけがのないよう支援する。チームのために自分は何をするか、何ができるか一発的に考えるようになっていく。また、チームの決まりごとや、下級生にも答えやすいようにアンケートで意見を求め、選手全員で話し合う。「生活面できちんとしている選手はタイムもいいです」と代田主将。「細かいことができれば大きなことはできません」と続けた。須河選手も「選手ミーティングが多くなりました」と自覚を口にした。

### ■箱根駅伝総合成績

- ①日体大
- ②東洋大
- ③駒沢大
- ④帝京大
- ⑤早大
- ⑥順大
- ⑦明大
- ⑧青学大
- ⑨法大
- ⑩中央学院大
- .....
- 中大 記録なし

### ■中大・箱根区間選手

- ①大須田優二
- ②新庄翔太
- ③須河宏紀
- ④多田 要
- ⑤野脇勇志
- ⑥代田修平
- ⑦徳永 照
- ⑧永井秀篤
- ⑨相場祐人
- ⑩塩谷潤一

### ■学生ハーフマラソン記録

- 時間・分・秒
- ①中村(駒大) 1・2・41
  - ②蛭名(帝京大) 1・2・49
  - ③山岸(上武大) 1・2・51
  - .....
  - 中大記録
  - ①須河 1・3・42
  - ②代田 1・4・01
  - ③徳永 1・4・20
  - ④三宅 1・4・49
  - ⑤大家 1・4・50
  - ⑥渡辺 1・4・55
  - ⑦西嶋 1・5・36
  - ⑧近藤 1・7・03
  - .....

※中大記録は部の計測による



# 明日へ走る

中大文学部2年  
関 いづみ



朝7時、日に照らされる中大の白いのぼりが、東京・大手町の和田倉門の前に立てられた。Cマークが朝日に照らされ、お日様の明かりが映ったかのように、朱色が輝いている。

「駅伝を強くする会」は、この日のために1年中、バスやホテルの手配、選手の応援に駆け回った。大手町は、そんな駅伝ファンであふれかえっていた。

ピストルの音と同時に、各校の駅伝チームがスタートを切る。ユニホームの原色がぎゅっと詰まった塊、それが、熱風のように一瞬で通り過ぎた。大きな歓声とともに両サイドの旗がバタバタと音を立てる。8時、第89回箱根駅伝が始まった。

スタートを見届けると、強くする会一行はバスに乗り込んだ。バスの中ではテレビ画面に声援を送る。山道では電波状態が悪く、受信不能になったりする。画面は止まったり、ぶれたりを繰り返して、やっと映ったと思ったらCMに切り替わるなんてことも。自分勝手なテレビに文句を言いながら中大の登場を待った。

途中、サービスエリアの女子トイレには長蛇の列ができていた。並んでいる人のほとんどが、ロゴ入りジャージに高いポニーテール。お団子髪やハー

フアップの子もいる。さまざまな大学からきたチアガールたちだ。朝早くからスタートを応援し、これから箱根へ向かうのだろう。輝く笑顔に朝の疲れは微塵もみえない。

## どよめき



山道で映し出された映像に、車内がどよめいた。2区の新庄選手が、フラフラになり今にも倒れそうな足取りでたすきを3区につなぐ。「どうした!! がんばれ!」

テレビを食い入るように見つめるうち、バスはあつという間に箱根・芦ノ湖に着いた。芦ノ湖付近はキャラバンを思わせる華やかさであった。各大学が、自分の大学のスペースからあふれんばかりの演奏、ダンス、エールを発信している。道の両サイドは旗をもつ応援者であふれ、奥には地元の人のお店まで出ていて、まるでお祭りだった。

駐車場の端で練習をするチアリーダー、冷たくなった楽器を、吐息で温めて、入念に準備するブラスコー。選手到着のずいぶん前から大きな声で、みんなの士気をあげる応援リーダー。まだかまだかと道の奥を覗きこむ参道の応援者、みんなが、熱風



を待っていた。

先頭で入ってきたのは東洋大学、次に日体大…強豪校が次々に走り去ってゆく。

おかしい。中大が来ない。参道がざわつき始める。「今、16位らしい」「いや16位はさっき行ったはず」「テレビに映ってないのか?」情報が飛び交い、不穏な空気が流れた。「途中棄権かもしれない」そんな話がちらほら出たのは、応援が始まってから、すでに1時間が経過していたときであった。それでもなお、応援団の激励の声が響く。チアリーダーは笑顔で震えていた。ブラスコーは切れた唇にリップクリームを塗って、演奏を続けた。誰も、あきらめなかった。誰もが、祈るように箱根の山を見つめた。しかし山道を下ってきたのは、一般車両だった。

## 下を向くな!



中大報告会は芦ノ湖前が一望できる駐車場で行われた。どんよりとした曇り空の下、冷たい風が容赦なく選手たちに吹き付ける。陸上部は皆、その風を避けるかのようにうつむいていた。中大は、5区完走までわずか1.7キロ手前で、低体温症と脱水症状のため、惜しくも途中棄権。連続シード28



年の伝統が、この日崩れ去った。

明日(3日復路)は、出場は認められるがオープン参加扱いで、完走しても、区間賞をとっても、正式記録は残らない。茫然と立ち尽くす選手もいた。涙を堪えている選手もいた。悔しさを押し殺しての、淡々とした報告が続いた、その時であった。

「下向くな!!!」

強くする会の、誰かが叫んだ。選手が、はっとして顔を上げた。涙で潤んだ瞳が、前を見据えた。



往路の報告会

翌朝、強くする会は5時30分に箱根町近くのホテルを出発した。前日と同じ場所に、同じように応援団が集まり、前日以上の応援をした。「中大OBです。旗は余っていませんか」「中大を応援したいんです」

記録が出ないのにも関わらず、強くする会が用意した応援小旗は瞬間になくなった。応援団長のエールを、チアやバンドが盛り上げた。中大ののぼりで、参道が白く染まった。途中棄

権だということが分からないくらい、参道の一角が、中大一色になった。

8時、応援団の大きな大きな団旗が、朝の風に翻る。みんなのエールを背中に浴びて、6区選手がしっかり前を向き出発した。

下を見ているだけでは、足元を、現状を、見つめ悲しむだけでは、何も変わらない。戦い続ける彼らには、自分のいる場所より常に前を、見つめる



## たすきが軽くなる日

中大文学部1年  
田中 未来

「パン」という心地よいスタートの合図とともに、選手が走りだした。ことしも東京・大手町にはたくさんの人が詰め掛けた。強風の音すらかき消すような観衆の熱気。色とりどりの大学カラーの応援旗が沿道をにぎやかに飾る。今や正月の風物詩としても名高い箱根駅伝。今回のテレビ視聴率は歴代3位の28.5%を記録した。

最もつらいとされる往路5区、日体大・服部選手、早大・山本選手。少し遅れて東洋大・定方選手が熾烈な首位争いを繰り広げていた。

私は体に電流が走ったような衝撃

力が必要だ。明日を、明後日を、求めて走らなければならない。そうでなくては、厳しい箱根の山は超えられない。

「スポーツは結果がすべてだ」という言葉がよく使われる。たしかに結果がすべてなのかもしれない。こんなに練習したとか、こんなにハンディがあったとか、それを結果の前に出しても、何の効力もなさない。けれどもそれは、結果から見た以前に対しての「すべて」であって、結果のあとの「これから」に対しては、中継地点でしかない。結果は、スタートだ。そこに居座ってはいられない。

シード権の安全神話は崩れた。けれどもこの屈辱を、明日につなげるべく6区選手は走りゆく。みんなの思いを託されて、過ぎ去る背中はたくましかった。今日この日から、明日へ。この年から、来年へ。屈辱の中継地点からつなげた、たすきの意味は大きい。

を感じた。大げさではなく、沿道にこだまする歓声が、何も聞こえなくなったのだ。この日のために買った新品のデジタルカメラには、結局手をかけることすら出来なかった。

一瞬のことだったが、走って行った選手の息遣いや地面を力強く踏み付ける足の音は、今でも鮮明に響いてくる。

印象深いのはその“顔”だ。歯を食いしばり、悲痛な表情。しかし目は力強く前を見据えていた。なるほど、この“顔”を見てしまうから、人は箱根駅伝に夢中になってしまうのか。

## 箱根駅伝【学生記者現場レポート】

追う者、追われる者の顔。テレビで見ているだけだと、それは必死に走っている顔に過ぎないかもしれない。沿道から間近にその顔を見てしまうとハッとさせられる。たくさんの重圧やプレッシャーを重い荷物のように背負って走っている、と気づかされてしまうのだ。

それなのに、あんなにも軽々と走ることができるのは、きっと待っていてくれる人がいるからなのだろう。誰かのためにまっすぐ走っている姿は、こんなにも人の心を揺さぶるのか。

2区で不調だった新庄選手も、きっとあとき背負っているものの重さに苦しんでいたことだろう。エース区間を走ること、そして中大の伝統を守ること。何度も足が止まりそうになったはずだ。“自分を待ってくれる人にたすきをつなぐ”その一心で走っていたと思う。



その姿を駅伝を強くする会のバスのテレビで見っていた。車内からざわめきが聞こえた。「新庄が…」そんな声が口々に漏れる。よろめきながら走る新庄選手を、私は何かが胸に突き刺さった思いで見っていた。もう走る力はほとんど残っていないはずなのに、何かに憑き動かされているように死に物狂いで走る姿が今も忘れられない。

たすきを3区の選手に渡したそのとき、称賛ではない声が上がったかもし

れない。下位に落ちたことに変わりはなかった。しかしほとんど倒れ込むようにして、たすきを渡した姿は駅伝に懸けるまっすぐな執念であったと思う。

そんな執念を、私は持っているのだろうか。彼の走りを見て、そんなふうにした。

たすきは4区を最後に繋がれることはなかった。しかしそのたすきの重さこそが明日の中大を強くするだろう。そしてうそのようにたすきが軽くなる日が来るはずだ。

それはあのとときの悔しさを忘れたからではなく、伝統の重みが消えたからでもない。選手がその重みに耐えうるくらい強くなったとき、たすきを軽く感じることができるだろう。

今回の敗北が中大の新たな伝統をつくるきっかけとなった。中大の一員として、はたまた駅伝ファンとして、今後が楽しみでならない。

## チーム再建のいい機会だ

中大駅伝チームの支援団体、「中央大学箱根駅伝を強くする会」（鈴木修会長＝スズキ株式会社取締役会長）では、今回の箱根駅伝でも恒例の応援バスを仕立てた。レース後は都内で選手たちを慰労し、激励した。OBOGらの声を集めた。（順不同、敬称略）

鈴木修会長 「過去を振り返るよりも、事実を受けとめ、これからどうしていくか考えるほうがいい」

中村重郎さん 「チームを立て直すいい機会だ。落ちるところまで落ちて、初めて気付くこともあるだろう」

須藤菊乃さん 「新たな気持ちで



学生記者の取材を受ける鈴木会長

アクシデントをいい方向へもってほしい」

佐々木伎予子さん 「復路は1年生に走らせたほうがいいのかという意見もあったようですが、やはり当初のメンバーでよかった。記録は残らなくても、みんなの記憶には残るでしょう」

清水康弘さん 「悔しい気持ちを来年にぶつけて、新しい中大の伝統をつくってほしい」

松浦靖さん 「私たちも大変つらいが、歯を食いしばって懸命に応援します」

朝倉博さん 「この悔しさをバネに来年は今以上に頑張してほしい。われわれは勝ち負けで応援はしない」

渡辺辰彦さん 「伝統があるから壁にぶつかる。逃げ出さずに、乗り越えたら、さらにステップアップできるはずですよ」

※ほか多数の方々からコメントをいただきました。取材協力に感謝します。

# 箱根生まれの駅伝育ち

## ～箱根駅伝往路優勝校表彰式プレゼンテーター～

# 「花束は中大に渡したかった」



中央大学文学部2年  
太田 実里さん

左から太田実里さん、吉田桃子さん(本人の顔写真以外は太田さん提供)

### 二十歳の祭典



中大文学部の太田実里(みのり)さんが、箱根駅伝の往路優勝表彰式でプレゼンテーターを務めた。1月2日、ゴール付近の芦ノ湖駐車場で往路を制した日体大選手に花束や地元特産の寄木細工のトロフィー、メダルなどを手渡した。

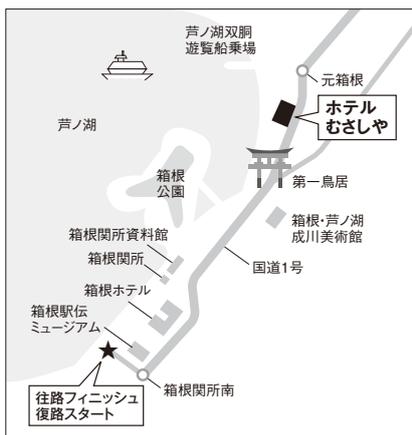
最大風速18mの悪天候は選手もつらかったが、振袖姿の彼女らにも容赦しなかった。丁寧にセットした髪を気にしながら「花束は中大に渡したかったですねえ」と途中棄権による「記録なし」を残念がった。

プレゼンテーターは箱根町で育ち、成人式を迎える女性から選ばれる。「駅伝の町」箱根ならではの恒例イベント。二十歳の祭典として地元に着し、駅伝人気もあって注目度は抜群だ。今回は中学・高校時代の友人、吉田桃子さん(上智大2年)と一緒に選ばれた。



日体大選手にトロフィーを渡す

式典を終えた太田さんは、大観衆の中を縫うように近くの実家へ急いだ。着替えをさっとすませると家業の『箱根芦ノ湖温泉ホテル むさしや』の手伝いを始めた。両親は実家で大忙しだった。正月は書き入れ時だ。目



と鼻の先にいる娘の晴れ姿を見たいのはやまやまだが、ホテルには大勢の宿泊客が滞在中。なかでも早稲田大と東洋大からは50年以上にわたって往路定宿の指定を受けている。

### 祖母のお願い 「優勝して」



「うちの孫が花束を渡すのよ、往路で優勝してくださいよ」。ホテルを切り盛りする祖母の小林泰子さん(76)は早大の渡辺康幸監督、東洋大の酒井俊幸監督に電話をかけていた。

エプロン姿になった太田さん。「中大がダメなら早稲田か東洋に勝つてと願っていましたが、うまくいきませんね(往路成績＝早大2位、東洋大3位)。ゴール地点で観戦したのは初めてでした。ずっと家業の手伝いをしてきて、応援はホテル前でするものと思っていました。いい体験をさせていただきました。すごくうれしかったです」

いつもの1月2日午前、一般客のお世話を終えると同8時の往路スタート(大手町)をテレビで確認。これを合図に夕食の準備に入る。宿泊者は両校のほか一般客が滞在する。毎年のおなじみさんも多い。早稲田は大所帯で選手と応援団・チア、OB諸氏の60人規模。東洋は選手10人ほどだ。

## 駅伝まんじゅう

同12時すぎ、駅伝選手は山登りの5区に入る。夕食準備を終えた太田さんは、ホテル前に机を出して『駅伝まんじゅう』無料配布のセッティング。「駅伝まんじゅうで～す」寒空のなか、大きな声を出して記念のまんじゅうを手渡ししていく。ほぼ1時間でカラになる。同じころ、テレビ中継車が大きな姿を見せる。解説の瀬古利彦さん(56)=DeNA陸上チーム総監督、4月1日に創設=とは早稲田の選手時代から約40年のお付き合い。

「瀬古さん!」太田さんが手を振ると、中継車の窓を開けて笑顔で手を振ってくれる。2人の年頭あいさつだ。続いて“山の神”とマスコミに評された東洋大・柏原竜二選手(富士通)が高低最高点874mの天下の険をサッーと上がっていく。「カッコいい!」このシーンが家業の手伝いを始めた高校時代からの駅伝観戦スタイルだ。

往路の仕事を終えた瀬古さんが「おかみさん、あけましておめでとうございます」と入ってくる。車中解説ではトレタイムが思うようにとれないからと早朝から飲食を控えていた。「お腹減ったよ、うどん頂戴、焼いたお餅入れてね」

夕食は早大が午後5時、東洋大が5時半から。宿は呉越同舟ながら食



瀬古利彦さん(左)と祖母・小林泰子さん

事には時差をつける。

「祖母は選手に“頑張る”とは言いません。十分に頑張っていますからね。私たちは“ごはんのおかわり、いかがですか”とお伺いすることや快適に過ごしていただくことで応援しています。選手の皆さんは往路が終わっても、チームはレース中だからピリピリしています。食事も黙々と食べてすぐに終わります」

夕食はこのあと早大応援団や一般客が続く。片付けが終わる9～10時によく一息つける。

## 復路へ午前2時起床

3日朝は午前2時起床だ。「2時組」と呼ぶ家族だけで仕事にかかる。朝食は復路スタート・8時に向けて東洋が3時。早稲田が4時。従業員がこのころに合流して、5時からは山下り以外

の区間を走る選手らの朝食時間。8時に一般客と続く。

ホテルが提供する朝の食事は、駅伝同様にたすきリレー状態で約6時間続く。従業員らの休憩は9時ごろ。テレビ画面は山下りが終わって、小田原一平塚

間の7区を映し出している。

「さっきまで箱根にいたのに、もう小田原。そしてアッという間に大手町。私たちの仕事も次から次へと忙しいですが、駅伝にはまりました。選手が祖母に“4年間ありがとうございました”と言っているのを見てジーンときました。私たちの気持ちが伝わったね、と祖母も喜んでいました。これからもこのスタイルで応援します」

箱根町は駅伝が終わると人口約1万3400人の静かな町に戻る。太田さんも中大多摩キャンパスに戻った。



## 柏原選手のサイン色紙第1号

太田さんは柏原選手(当時東洋大)の走りに魅了されてサインを求めた。のちに4年間連続して山下りで区間賞獲得の“山の神”が箱根デビューして間もないころだ。「えっ書いたこと、ないです」。当惑しながら書いた名前は小さかった。次の機会に父親の八束(やつか)さんが「NO.1と書いてください」と頼むと、「そっ、そんなことできません」。今では上手にサインできるようになった話題のランナー。サイン色紙のトレーニングは太田さん親子の依頼から始まった。

# 「僕もオリンピック選手になりたい」

## 第3回中央大学陸上教室



## 子どもたちが大喜び

4月上旬の陽気に恵まれた2月2日、「中央大学陸上教室第3回」が中大多摩キャンパス陸上競技場で行われた。走る、跳ぶ、投げるという各種スポーツの基本となる動きを中大選手らが熱血指導。参加したのは小学3～4年生52人、同5～6年生46人。未来の中大・五輪選手だ。用意された赤や青のTシャツを着て、思う存分、広いトラック&フィールドで陸上競技を楽しんだ。

### 先生はオリンピック選手

「ウノ(1)、ドス(2)、トゥレス(3)、クアトロー(4)…。お兄さんはこれで限界だ」。少人数に分かれたウォーミングアップでロンドン五輪代表の舘野哲也選手(400m障害=商3)が小学1年生にハッパをかけられた。赤石沢快斗くんはサッカー少年。コーチがいつも口にするスペイン語を覚えていて、「イチ、ニ、サン、シ」の掛け声をきれいなスペイン語で表現した。

子どもたち8人の顔を見ながら、舘野選手は「走るときは太ももの裏の筋肉が大事。ここをちゃんと伸ばしておくといいよ。また5回やります。イチ、ニ…」。「ちょっと痛いけど気持ちいいです」と子どもたち。



舘野選手とウォーミングアップ

短距離では、五輪代表の飯塚翔太選手(法3)がスタート練習を教えた。「大事なのは構えだね、速く走るには大きなエネルギーが必要。腕を大きく振る」。実際に走って見せる。16人の子どもたちは「うわー、速いよ、すごいよ」と驚いた。



腕の振りを教える飯塚先生

### 体が小さくても大丈夫

長距離の指導は駅伝チーム。12人集まった将来の箱根駅伝ランナーに、駅伝のスピードを実感してもらった。復路8区で“幻の区間賞”と呼ばれた永井秀篤選手(文2)が400mを1周72秒ペースでいつものように快走すると小学生ランナーはそのスピードにびっくりし、駅伝選手へのあこがれをさらに強くしたようだ。

代田修平選手(経3)が「長距離は体の大きさに関係なく、努



ボールを使った練習もした

力をすれば強くなれます。箱根を走った大学選手たちも最初から速かったわけではありません」とエールを送ると、子どもたちは大きくうなずいた。

陸上教室は午後1時開始。ほかにもやり投げ、走り幅跳びなど多くの種目の教室が同4時過ぎまで、受講生を入れ替えて複数回行われ、最後は全員が50m走のタイムをとった。五輪選手らとの記念撮影やサイン会もあるなど“陸上デー”はもりだくさん。

「僕もオリンピック選手になりたい」「そうだね頑張るよ」帰路には参加した親子のこんな会話が聞こえてきた。



やり投げ選手の試技を見る子どもたち